

時雨の炬燵

二

紙屋政

〔解題〕 近松門左衛門の傑作「心中天網島」を近松半二と竹田文吉とが増補して「心中紙屋治兵衛」と題して安永七年四月廿一日から竹田萬治郎座で興行したのが本曲の原作である。近松翁の原作を増補改修して、舞臺を

賑はし、筋を複雑に技巧的にするために、上巻の發端へ浮む瀬の詐偽場を、下巻の紙屋の前へ長町の段を増補して、大和屋以下を削つて、紙屋の跡へ直ぐに二人の心中をつけ、それも死なずに助かる事になつてゐる。尤も紙屋の段は文章は原作とほぼ同じである。

操芝居では後に「増補天網島」の外題で度々繰返して興行されて居る。而して「天網島時雨の炬燵」の外題は歌舞伎の方で用ひられたのが、淨るりに逆移入されたのかと思ふ。

こゝに収めた「紙屋の段」は今日歌舞伎で演ぜられる筋と同じである。

へ直ぐに佛なり。オクリ門送り。さへそこゝに。治兵衛は傍にあり合はす定木を枕うたゝ寝の。ホシあたる炬燵の小春時。増まだ曾根崎を忘れずかと。退ける蒲團の内さへも。涙に濕るその風情。おさんは呆れつくゝと。フシ顔打守り打守り。詞エ、あんまりちやぞえ治兵衛様。それ程名残が惜しいな。誓紙書かぬがよござんす。なぜに。お前は其の様に。私が憎うござんすえ。ア、コレイノコレ。そりやまあ何を言やるぞいの。子仲までなした中に。イ

エノゝゝ。憎いさうな憎いさうな。尤もちや誤つた。悲しい涙は目より出ゝ。憎ましやんすが嘘かいな。地一で。無念な涙は耳からなりとも出るな。昨年の十月中の亥の子に炬燵明けた祝らば。言はずと心見すべきに。同じ日儀とて。コレ爰で枕。並べてこのかたより零るゝ涙。足かけ三年がその間。は。女房の懷には鬼が住むか蛇が住む。地露程も怪氣せぬ。そなたに言ふも恥かしながら。詞この間も曾根崎で。残らず聞いた小春めが不心中。今といふ今夢も覺め。思ひ切つてはゐるけれど。ソレさつきにも話した通り。あの太兵衛めが。急に身請をするとの噂。退いて十日も経たぬ内。請出さるゝ義理知

き立て。フシ恨み歎くぞ誠なる。詞オ、らすの。小春めが事は心残らねど。地問

屋中の交際にも。金の工面に盡きし故。理と合點して親にも替へぬ戀なれど。方をいうても。金の工面に盡きた此小春を退いたの何のとて。得知れぬ奴思ひ切るとの嬉しい返事。調是程眞實の身。ノウ仰山な。それで済むなら易ら口の端に。かゝるが無念な口惜しな心で。何の太兵衛の所へ行かしやんと調サ。思はず涙を零したわいなう。しよ。請出されたら其儘に。死ぬる覺て取出す緇交の。紐付く袋押開き。フシエ、そんならほんまに小春様は。お前に愛想づかしを言うて。アノ太兵衛が此のさんが義理立たず。どうぞ命が助所へ行く苦かえ。ハテきよとくしいな事どうせうと。初めて明かす女房の其の聲わいの。オ、そんなら小春様は誠詞ム、ンそんならアノ。不心中と見生きて居る氣ぢやないわいな。死なしやんすわいな。ハテ扱て何ば發明でも。せたのは。そなたの頼みか。アイナア。さすがは町の女房ぢや。アノ不心中者ム、すりや矢張りおれを大切に。地な。小春さんの方は急な事。ソレ其が何の死なうぞ。イエ／＼さうぢやござんせぬ。小春様に不心中は。モ芥程ずの畜生のと。恨んだ心が恥かしい。小判五十兩と。地残りわしがとかいもないけれど。地何時ぞやよりお前の詞ア、コレイナアコレれいふ手間でとはしら茶裏。黒羽二重も色替へぬ。素振。何を言うてもうか／＼と若し。こな様往て。どうぞ殺さぬ様にして進淺紫の糸目結ひ。正田鹿の子も惜しげ悲しい目を見ようかと案じ過して小春せて下さんせ。どうぞ殺さぬ様にしてなう。子供の物も掻い集め。内輪に見様へ。詞いとしと思はんす。治兵衛進せて下さんせいな。ハテ小春が命助ても二十兩。よもや貸さぬといふ事は。殿の爲ぢや程に。思ひ切つて下さんせ。けるは百五十兩。せめて半金なりともない物までもあり顔に。夫の恥と我がと據口説いてやつた文。地引かれぬ義手附けに渡し。取留めるより外はない。義理を。一つに包む風呂敷の。フシ内

に情ぞ。籠りける。詞私や子供はなに足の爪を放しても。皆夫への爲ちやも着いでも。とかく男は世間が大事。身の跡の間では詮ない事。地サア／＼の誓紙をひけらかして戻り。コ、此請してあの太兵衛めに。一分立てゝ下早うと三五郎呼出し渡す風呂敷懐へ。ア、えらいやうでもどぞが女子。さんせ。地スエテと言へどいらへも涙聲。フシ金押入れて立出づる。詞治兵衛殿。おオ、過分なぞや忝い。ガ手附渡してお宿にかと。地門口這入る五左衛門。取止め。請出して圍うて置くか。又内オ、是はしたり舅殿。マようお出でもへ入れるにからが。マそなたは何夫婦はうち／＼。三五郎が背負うたる。引裂き／＼。治兵衛が顔へ打付けて。おと、地言ひさして打萎るれば。詞ア、風呂敷見付けて。詞コリヤ阿呆め。そ何のいな／＼。必ず案じて下さんすなの包みをどこへ持つて行くのぢや。エ上にとどさり。フシ大臼なり。地おさんえ。ハテモ子供乳母か飯焚か。面倒エ又質屋へうせるのか。こつちへおこは聞兼ねコレ父様。詞ソリヤお前聞えながら／＼眞實の妹。眞實の妹／＼持せと地引つたくれ。悔り拍子拔参りませぬ／＼／＼わいな。こちの内の身つたと地思うてといふも胸まで突つかの。宵に知れたる心地して。フシ一間代の衰へたのも。皆お前から發つた事ける。涙吞込み吞込んで。夫に立つるの内へ逃げて行く。地男は猶も圖に乗ないもせぬ銀山にかゝつたと言うて。貞節は傍て見る目も。いぢらしき。詞つて。詞大方斯うであらうと思うたわ三十兩借り五十兩借り。あけくには其へエ、何にもいはぬコレ女房ども。親い。着類着そげを質にまげて。をやまの銀山が潰れたとやら。元も子もないの罰天の罰。地佛神の罰は當らずとも。狂ひに仕上げるのぢなをやま狂ひに。様にして仕舞はしやんしたぞえ。男氣女房の罰が恐しい。赦したもとばかコリヤヤイ女郎の誠とな。鬼瓦の笑ひな治兵衛殿。男の事なり言出せばこつりにて伏拜む手をア、コレイナア勿體顔とはないものぢやぞよ。サア／＼ちも恥と。證文も残らず戻し。済まさない／＼／＼わいな。詞ハテモ手／＼手短かにおさんに隙やりや。女のしやんした其の時には。コレ。其のマ

ア怖い顔に涙をこぼして。悦ばしやん。身の言譯に紀伊國屋。ナホス小春は兵衛とつくと心を定め。調コレ舅殿。した事をお前よもや。忘れはさしやん。爰へ來かゝりて様子ありげな内の體。この五十兩は女房おさんが着衣装道具すまいがくゝなお前。また主の惡所通達うてはいかどと用水の、フシ陰に隠れの代り。不足にはあらうが持つてござひも。元の發りはこな様から發つた事。て聞き居たる。地とは知らずして治兵衛は手をつき。詞イヤモ御立腹の段はかい。イヤ又どう言うてもへ、大が滅つたぞと。本家の不審が立つた時。御尤も。ガおさんが申すは皆むだ事。身代ぢやての。ガあのしだらを見るかハイ舅殿に取られました。と鼻毛らし私心に存ぜぬ事。地此のまゝ添はせてらは。いよゝ娘は連れて去ぬ。サアう言はれもせずと。サア。口へ出して下されと。詫ぶれど聞かずイヤならぬ。マアゝ待つてゝ下さんせいな。モ言ひとそさつしやらね。其の志を推量わい。詞何にもいふ事聞く事ないわい。あゝ言出しては聞かぬ父様。私やマアして。初手の間の茶屋通ひは。世間へおさん戻せば事は済む。しかし拵へお歸ります。いふ迄はないけれど。勘太聞えにでもさつしやる事と。モほんにこせし道具衣装。改めて封付けんと。郎が事。勘太郎が事を頼みますぞえ。やれゝ。行かしやる度々にわしや。地立上ればおさんは驚き。詞ア、これわしや後から拜んでばかり居たわい。父様。衣装道具も揃うてある。改める朝飯前に忘れずとナソレ。桑山の丸子なく。地その大恩を忘れ。阿呆ぢやには及ばぬと。地駈塞がれば突飛ばし。ゝ吞まして下さんせえ。オ、氣づかのイヤ白痴のと。假初ににも勿體ないぐつと引出し。ムンコリヤどうぢやと。ひしやんな。マ思ひも寄らぬ今この時こらへて下されこちの人。父様去んで一重二重引出しの數もありだけ押入れ宜。とんと心も落付かねど。そんなら下さんせと宥めつ叱りつ兩方へ。我がまで。底を叩いて五左衛門口あんどり暫く別れて居よ。舅殿も娘の事。まん身一つのせつなぞ辛さ思ひ。やられてと明き入れ物。差すにも差されず詞ささら慘うもさつしやるまい。ツイまたフシ道理なる。地サッパリ思ひは同じ憂思へ暫し。フシ呆れて居たりける。地治戻りやる様になろぞいの。アイ、

く。コレ申し治兵衛様。必ず短氣の出ぬ様に。エ、小面倒な暇乞ひ。きりあふぎの別れさせまするも。皆私から起つた事。コレ堪忍して下さんせく。花瓶の松に鶴龜。酒の取つたが無かつ勘太郎。母様なう。母様なうを聞捨てえ。サイナウ眞實な入譯を。聞けば聞たさかいで。水を銚子に入れて來た。に跡に。見捨つる子を捨つる。藪に夫婦の二股竹長き。別れとッ出でて行く。にはそなたもおれも。スリヤこなさん。阿呆と言はんすなえ言はんすなえ。小陰より。小春は内へ駈入れば。胸ヤと抱きしめたる。ないじやくり。まんせく。アハ、二人ながら泣かんる内にも稚子が。母様。なうと慕ふ子。胸と。胸とに言はせけり。高砂や。すの。ア、コレ泣かんすないのく。を。見るに二人はいと猶。思ひくづこの重箱に餅入れて。片言交り阿呆ハ、ア扱てはコリヤ嬉し涙ぢやの。オを。れ抱きしめ。賺せばすやく。稚子手に。かへ二人が真中。調サアく。が。こぼれたわいなう。さりながら。を。るぶりながら口説き言。調何か。氣疎いものになつたぢやないか。治兵衛様と祝言しては。どうもおさん根崎で。愛想づかしな悲しいお別れ。え。アノさつきにお家さんの言はんす様へ。エ、何のママ濟まぬ事はござん思ひ切つては居るけれど。アノ太兵衛には。ナコリヤ三五郎よ。おれが留守せぬわいの。お家様は出しがらになつに身請しられては。所詮生きては居ぬになつたら。大方爰へ。小春さんがごて。是程うまい鯉節を。お前にやらんす覺悟。此の世の名残にたつた一目と。さんす程に。そうしたらアノ旦那様と事ぢやもの。志を無足にせずと。サ、來ごとは來ても折悪しく。立聞した内アノ。アノ。オ、さうぢや。祝言をさきりく飲んで注さんせいのく。オ

オコリヤ三五郎がいふ通り。祝言ちやせて来いと言うて。祖父様が門口まで。て申すべくい。勘太郎が事を小春さんと思ひ義理もある。互に末期の水盃。連れて来て下さつたわいなう。地アへ。くれぐれ頼み上げ。エ、何のムさらばお酌をや申さうかい。説解。と二人は立寄つて。あたふた脱がす墨事ぢやぞいな。コリヤ何の事ぢやぞいながらに取上ぐる。酒と。水とはかは染の。下には何か白無垢に。おさんが筆な。ソリヤ聞えませぬおさん様。私やらの。土になる迄葬禮の。一本花やの散し書。御エ、何ぢや。涙ながらにお前からお禮受ける覚えはない。コリ鶴龜の。ク、蠟燭立も消ゆるナキ身と一筆しめし。先程と様連れだちヤ私をば。衛ながらすのかいな衛ながア思へば。いと胸せまる。詞サア歸られぬ節。小春様御忍ばせの姿。慥に見受けゆへども。御存じの譯合ひ故。おさん様を呼戻して下さんせ。とエ誰ぞマア。誦うたひが来いでな。御目もじもなり難く書残し申上。立つて見居て見。うろく。とフシ譯も地フシカ。りと見やる外面へ四つ子の。墨ア、コレ治兵衛様。私にも一寸讀まして。涙にくれ居たる。地治兵衛又も引寄せの衣に草鞋がけ。詞安養寺尼寺。常念て下さんせ。いな。エ、兎角連合ひて。詞ナニ。男五左衛門申入れ。鉢。そりやこそ来たわと。地阿呆はフシの命が助けたさ。小春さんへわりなきエ、何アノ舅親父の恩知らずめ。汝が驅出で。地抱いて這入るを顔見て悔り。お願申上ゆひしに。お聞届け給はる嬉何のろくな事書きあがるものぢや。ア詞やお末ぢやないか。わりや一人戻つし。海山にも代へまほしく。何ぼうア申し治兵衛様。その様に腹立てすに。たか。さうしてマア。變つた形をして。忝う存じ上げ。エ、この御恩送りマア讀んで見やしんせいな。エ、面アイ祖父様にこんな美しいべとして貰いには。末々お二人を御夫婦となし倒い。エ、何々男五左衛門申入れ。うた。餘りこのべは白いに依つて。より外なく存じゆ。その上父様の六年以前能はぬ銀山にかゝり御損失を何やらたんと書いて下さつた。此の書眞實を聞き。我が事は。是までの縁とかけけ所。聖男の由縁を以て。證文殘いたのを。父様や小母様にちやつと見諦め。又お末事は。こなたにて育らず返し下され。千萬忝く存じ奉ゆ。

是非に及ばぬ。豫て言合はせし如く。最 おぢやと。地手を取り急ぐ惡縁の。未
期所は網島あみじまの大長寺。人なき内にサア は。涙の藻鹽もしほ草くさ噂の。種となりにつけり。